

第17回 木曽川上流自然再生検討会 委員意見

項目	No	委員	委員からの主な意見（議事要旨）	対応状況／対応方針案 ^{注)}	説明資料 対応頁		
(1) 報告事項	1) ワンド等の水際湿地の再生 (木曽川)	委員	①	モニタリングで得られた知見や学識者の研究成果、新たな試行（面的掘削）等の取組みを踏まえ、今後の保全対策を引き続き検討するとよい。	◆モニタリングから得られた知見を基に、検討を進める。	—	
			②	平成30年前後にイタセンバラが顕著に増加した要因が分かれば、今後のワンド環境再生に活用できる。また、木曽川の上流部と下流部でイタセンバラや二枚貝類の分布に差が認められる要因も突き詰めることで、イタセンバラの生息に適した環境を把握できると考える。	◆個体数の増減について、出水の発生状況や生息環境との関係を再整理して、要因分析を行った。 (木曽川水系イタセンバラ保護協議会 第5回生息域内保全部会で報告)	—	
			③	イタセンバラ保護に関する地域連携は、よい取り組みである。当日参加した子供たちの感想を紹介してもらいたい。また、活動時に地元の新聞社やケーブルテレビの取材を組む等、広報に力を入れると子供たちのモチベーションが上がり、相乗効果があると考ええる。	◆羽島新報（地元情報誌）およびCCN（ケーブルテレビ）を通じて広報に取り組んだ。	P. 18	
			④	施工の際に、掘削土の中にイシガイ類が含まれる可能性があるため、配慮が必要である。	◇（貴重種情報記載につき取扱注意）より回答） これまでも、施工前にイシガイ類を救出してから掘削を行っている。	—	
			⑤	ワンドの掘削や樹木伐開によって、イタセンバラや二枚貝の餌環境や生息環境が改善しているのか。	◇（貴重種情報記載につき取扱注意）より回答） これまでの調査において、掘削により新しいワンドを掘削すると、頻繁に冠水して水循環の良い良好なワンドが形成され、速やかに二枚貝が定着することが明らかになっており、それらの結果を踏まえると餌環境も良好になっていると考えている。	—	
	2) ワンド等の水際湿地の再生 (揖斐川)		⑥	揖斐川の水路型のワンド再生について、河岸部は存置することとしているが、河岸部は土砂が堆積しやすく樹木が繁茂しやすいため、良好なエコトーンの場合以外、基本的に河岸部の地盤も切り下げて冠水頻度を上げる方がよい。	◆河岸部を切り下げて様なワンドとするのではなく、自然の営力に任せ、多様なワンドを創出する方針としているが、木曽川水系イタセンバラ保護協議会を通して有識者にご助言を頂きながら、順応的に対応していく。	P. 23	
	3) 緩流域環境の再生 (杭瀬川)		⑦	揖斐川、長良川にはワンドが少ないため、支川である杭瀬川や伊自良川の緩流域環境が、生物の生息場として重要となる。一方、近年は外来種のシベリアイタチが増えており、在来種に影響を与えている可能性も考えられるため、今後の留意点として認識する必要がある。	◎令和4年度の河川水辺の国勢調査において、木曽三川いずれもイタチ属としての確認がある。糞や足跡等の痕跡からシベリアイタチと識別するのは困難であるが、引き続き環境調査における目視・痕跡調査において外来哺乳類の実態把握に留意する。	—	
	4) 緩流域環境の再生 (伊自良川)			⑧	伊自良川の再生箇所は、ヘラブナ釣りでの利用が多い。モニタリングでは、外来魚のゲンゴロウブナ等が確認されているが、漁協が放流している可能性はないか。	◆伊自良川での漁協によるゲンゴロウブナの放流は行われているという情報は無いが、モニタリング調査において引き続き動向に留意する。 (今年度は新堀川において夏季・秋季それぞれ1個体確認されている。)	—
				⑨	放流を法的に規制できるわけではないが、国内外来種のゲンゴロウブナについては、本来の河川環境に戻す自然再生の観点からは望ましくない。	調査で捕獲された場合は処分している。	—
	5) コアジサシの繁殖状況		⑩	堤内地では羽島市の工場敷地内で少数が繁殖している。同様に、高水敷の伐開跡地等の人工裸地も、コアジサシが利用することがある。人が入らないように工夫することで、河道内でコアジサシが繁殖できる場所を創出できる可能性がある。	◎高水敷で営巣が確認された場合は、可能な範囲で人が入らないようにする等の保全措置を検討する。 (令和7年度は人が立ち入れない中州での営巣のみが確認された。また中州の工事業者に対し、営巣箇所を周知した。)	P. 37	
				⑪	長良川については、近年の増水だけでなく、河道掘削による砂州の切り下げが、コアジサシの営巣地の冠水に影響しており、現在の河道においてコアジサシの繁殖場を確保することは難しいと考える。今後の河道管理において、掘削の際に表面の玉石は残して砂州の平坦化を避ける等、掘削の方針を検討する必要がある。	◆現在の河道整備は掘削時に玉石を残す方針としており、今後も同様に対応する。	—
	6) オオサンショウウオ対策		⑫	オオサンショウウオの生息場の再生を考える上では、隠れ場の空隙だけでなく、採餌等に利用する場所の把握も大事である。隠れ場から出て活動する夜間の行動範囲について情報があれば教えて欲しい。	◎安全面の観点から夜間の目視観察は実施していないが、引き続き有識者からご指導を頂きながら、今後のモニタリング方法を検討する。	P. 53	
(2) 次年度のモニタリング計画(案)	⑬	⑬	揖斐川のワンド等の水際湿地の再生のモニタリングでは、盤下げ後のワンド内の面的な地形変化が重要であるため、地形の面的な変化もモニタリングして把握する必要がある。	◎令和7年度に整備したワンドをはじめ、整備したワンドについて面的な地形変化の把握を検討していく。	P. 51		
		⑭	モニタリングを続けることで、ワンドの面的変化の経時的な変化傾向も分かるような成果が得られるとよい。				
		⑮	連続性の確保については、魚道が設置されても機能していなければ効果がないので、地元の漁協への聞き取り調査等を行って確認するとよい。また徳山ダムの弾力的運用等も影響するため広域的な議論が必要である。	◆地元の漁協と話す機会に、魚類の遡上状況や魚道の機能性等について必要に応じて情報収集している。	—		
(3) その他	1) コクチバスの生息状況 (揖斐川)	⑯	揖斐川ワンドの調査で、コクチバスの稚魚だけが採捕されているのは、成魚が採捕されにくいからか。	◇調査対象場所がワンド内のみであり、遊泳能力の弱い稚魚だけが生息していたと考えている。	—		
		⑰	近畿地整の木津川上流河川事務所でもコクチバス対策の検討が進められている。他河川との連携や情報交換も行うとよい。	◆「木津川上流におけるコクチバス対策」での産卵床周辺の駆除やフラッシュ放流による駆除等の情報を収集した。また岐阜県コクチバス駆除対策推進協議会で連携して、対策に取り組んでいる。	—		
	2) 事業スケジュールの見直し	⑱	事業がこのまま終わってしまうと、現状維持されているイタセンバラ、二枚貝の生息環境が急速に悪化すると想定されるので、事業スケジュールを延伸することは必要だと考える。一方、杭瀬川の緩流域環境の再生のように、木曽川・揖斐川に比べると、目標が明確でない取り組みがある。自然再生計画の見直しにあたって、課題と目標を具体化しておくことが必要である。	◆今年度の流域委員会において事業スケジュールを延伸している。またご意見を踏まえ、令和8～9年度に自然再生計画の見直しを行う。	P. 2		
3) 自然再生計画の見直しについて							

注) ◇：第17回検討会当日に回答が済んだ事項、◆：対応状況（対応済みまたは対応中）、◎：今後の対応方針